

鈴鹿大学 パネルディスカッション 遠隔授業の「過去・現在・未来」  
—with コロナ時代の教育実践—

令和2年8月1日(土)

主催：鈴鹿大学こども教育学部

1. 挨拶 川又 俊則 (鈴鹿大学副学長、こども教育学部長)

コロナ禍による昨年とは違う状況(教育現場において)があり、検証が必要  
さまざまな報告があるが、今回は三重県内の学校で行われてた実践報告を通して、生徒への影響や、  
今後の教育活動における基礎的な資料提供の場となればと考える。

2. 基調講演 教育の質向上と ICT の活用—遠隔授業のこれまでとこれから  
山路 克文 (鈴鹿大学こども教育学部教授/社会福祉学)

○現状：コロナ禍による教育機関の混乱

- ・先生は疲れている→孤軍奮闘状態
- ・教育分野の ICT 化は確実に進んでいる— 例：教科書に登場した QR コード(各分野において)  
→タブレットを想定、いつでも遠隔授業可能にする体制
- ・不測の事態に不測の加重労働



○1. 教育改革の方向性からみた「遠隔授業」 (参考文献：渡辺淳『アクティブ・ラーニングとは何か』)

(1)知識注入型学習から問題解決学習へ

- ・1998年「学習指導要領」より→「総合的な学習の時間」に期待された「新しい学力観」  
⇒アクティブ・ラーニングの先駆け(「深い学び」)

(2)質的転換答申

- ・2012年の中教審より→従来の受動的な教育から学生の能動的な学習への転換が必要  
⇒アクティブ・ラーニングという言葉が登場

(3)2016年8月中教審答申

⇒アクティブ・ラーニングの定義→「主体的・対話的で深い学び」

(4)2016年12月中教審答申→カリキュラム・マネジメントという概念の登場

新しい時代に必要となる資質・能力が示される

→「何を知っているか」から「何が出来るようになるか」

⇒アクティブ・ラーニングの位置づけ→主体的・対話的で深い学びのための方法論

(5)アクティブ・ラーニング導入の国際的背景

- ・コンテンツ(内容)からコンピテンシー(資質・能力)へ
- ・ティーチング(教え)からラーニング(学び)へ
- ・SDGsを意識した教育

(6)アクティブ・ラーニングが成立する要件

- ・生徒が意義を理解している
  - ・教室内に発表・表現を励ます雰囲気がある
  - ・環境の是正
  - ・教育方法に関する社会的合意
- ⇒遠隔授業はアクティブ・ラーニングの手法の1つ

○2. ICT を活用した教育改善 (参考文献:「ICT を活用した教育改善モデルの紹介」(『大学教育と情報』2019 年 No. 3))

- ・専門分野の学士力の到達目標実現のための授業
  1. 分野別の学士力
  2. 到達目標を実現するための教育改善モデル
  3. 改善モデルに必要な教育力、FD 活動と課題
    - 参加型・発信型の教育が出来ること
    - ※社会福祉分野の特性
      - ・社会福祉士 国家資格取得が目標
      - ・厚生労働省 → 教育モデル (シラバスモデル)
      - ・3本の柱を提供 (アクティブ・ラーニング的)
  
- ・教育力を高めるための FD 活動と大学としての課題
  - ①FD 活動の意義の共有・継続的な活動の必要性など
  - ②大学としての課題
    - ・学内外の多様なコンテンツのアーカイブ化
    - ・ICT 活用のための、教育支援体制の構築の必要性
    - ・各分野・各団体との連携の呼びかけ、学内体制の整備
    - ・世界を視野に入れた教育 (SDGs)

○3. 対面授業から遠隔授業 (オンライン) へー課題と展望ー 参考: 関西大学の取り組みより

- ①コロナ対策終了後 → 非常時には、通常時の教育体制では十分に機能しない
- ②コロナ後の課題
  - ・再びに備える教育体制の工夫・改善 (クラウドサービスの活用など)
  - ・教育者として学生の心のケア
    - ストレスの蓄積(不安が積み重なっている)、ネガティブな記憶ばかりが残らないように
    - やったという実感が持てるのだろうか
  - ・後戻りできない「遠隔授業」
  - ・各種機関との連携教育が可能になるのではないか
    - その一歩で新たな格差、取り残された学生への支援
  - ・遠隔は唯一ではないが、必要でもある
    - 何を遠隔授業で伝えるのがよいか
    - 精査することが必要、遠隔授業に向いているのかどうか
      - 統計は遠隔授業・
  - ・遠隔授業のための課題→大手は何年も前から準備が出来ている→余裕がある
    - 大学間での格差の広がり

①私立の中学校は1人1台タブレットを利用しているらしい

→公立の中学校は環境面で不足している→公立中学校だから何もしないままでも良いのか

②休校になったら動画授業でカバーできないか

・HPの活用→教員はすべて更新することが出来る

→動画をどうやって載せる？容量の問題は？

→YouTubeでの動画の配信へ→世界に配信→抵抗感あり（自分の授業を世界に見せる）

→限定公開の活用→教員側の安心感へ

※校長より

うまい授業より「知っている先生」が動画で見ることが出来ることに意味がある

→子どもに対する良い影響になるのでは

③配信のタイプはいろいろ

黒板、デジタル教科書（著作権は交渉）、パワポと声、実技や実験、学年通信など

→UPした動画は500本以上（4月中～5月末）

④成果

・動画の授業－10分いないにすることが効果的

・生徒に安心感－知ってる先生が一生懸命授業している

・保護者も好意的－先生の一生懸命さが伝わった

・何度も見直せる－自分で確認できる

・授業力の向上－動画は10以内と決まっている→授業内容を明確にする必要がある

⑤課題

・どのような形で学んでいるかが分からない→生徒の自主性に左右される

→何もしていない子もいた

・ライブ感はない→子どもの反応が分からない→生徒同士の反応の連鎖がない

・字幕&翻訳機能が乏しい→外国につながる生徒への配慮

・平等性に欠ける

#### 4. 高等学校の実践報告「名張青峰高校と ICT」 向山明佳教諭 三重県立名張青峰高等学校

##### ①名張青峰高校 開校して 5 年 ICT を活用した高校として

- 2016 年開校→Windows10 タブレット、全館 Wifi、全教室電子黒板（1 年生全員にタブレット）
- 2017 年 特別教室に電子黒板（1・2 年生全員にタブレット）
- 2018 年 G Suite と Crassi 導入（全校生徒にタブレット）
- 2019 年・2020 年 Chromebook 実証 → 使い勝手が良い
- 2021 年 新入生全員 Chromebook 導入予定

##### ②遠隔授業のスタイル

- ・タブレットは県のもの→家に持って帰ることは出来ない
- ・GoogleClassroom ではすでに繋がっている

↓

双方向授業→3 月に予告なく Zoom での HR 連絡→15～16 人アクセスした

4 月から 双方向の混乱、ギガ数→双方向は難しい

→リアルタイムストリーミング授業、録画配信授業、課題配信授業（フォームなど）

##### \*メリット・デメリット

- ・規則正しい生活のために→双方向やリアルタイムストリーミングを重要視（効果有り）
- ・学習効果をあげるために→動画を見直す→録画や課題配信授業の効果が高かった
  - 280 人中 230 人が時間に合わせてられた
  - 6 月からポイントだけ解説し、授業はしない
    - 期末考査で昨年と同じ問題で検証
    - 若干点数が下がったものの大きな変化はなかった
    - 自主性のない子には格差が広がっている→問題

##### ③先生全員が ICT を使えるようにするには

- 1 番目にしたこと→得意な先生で ICT プロジェクトチーム、生徒全員の授業を持つ
- 2 番目→生徒全員が使えるように（教員より早い）
- 3 番目→先生間の口コミで広げる、職員会議後に 5 分間セミナー

##### ④「遠隔授業」と「近接授業」の考察

- ・どちらが良いというものではない
- ・最適解はミックスの中にある
- ・つながり続ける学び→授業がないときでも（ニュースの共有や質問の受付など）
- ・ICT は必須の学習基盤
- ・教師の創意工夫が必要

## 5. 小中学生の意識調査から「子どもたちが望む遠隔授業の在り方」

伊東 直人（鈴鹿大学こども教育学部教授/学校経営）

### ①意識調査の結果報告－授業を受けてどんな気持ちになりましたか

- ・ ICT を活用し、授業を受けた児童生徒（小中）に実施
- ・ 有効回答数 508 人

### ②結果

- ・ 先生の顔を見ることで、児童生徒は安心感を得られた。
- ・ ビデオ配信を受けながら、友達のことを気に及んだ
- ・ ビデオ配信は、1人で学習するより、楽しく感じたり、気分転換になった
- ・ ビデオ配信では、みんなで勉強している気持ちにはなりにくかった
  - ⇒1人でするよりも学習効果が期待できたが、児童生徒は「人とのつながり」を求めている
    - 中学生の方が小学生より、みんなで勉強している気になれなかった。
    - 先生の顔を見る安心感と、友達のことを気になるのアンケート結果の平均値は同じようになつたが、度数分布を見てみると、友達を気にしている度数分布の方が高かった。
    - 意見には「ビデオ配信は先生と授業している気分になり、宿題が1人でやる学校の授業の気持ちになった」「みんなで勉強というよりは先生と1対1で勉強しているみたいだった」との声も

### ③考察

#### 1. ICT を活用した遠隔授業を実施する際

- ①少しでも先生の顔が見える方が、安心感が広がる
- ②友達とのつながりづくりの工夫の必要性

→例：ラジオ番組の視聴者にみたてたような動画作りなどはどうか

#### 2. 学校再開後

- ①あたたかな人間作りを優先する
- ②「みんなで学習している」を意図的に取り入れる

⇒そのためにも十分な回線やデバイスといった環境整備も重要

## 6. 大学での遠隔授業と学生の実践・満足度について

犬飼 和夫（鈴鹿大学こども教育学部講師/情報教育）

①今年度より G suite を利用

②遠隔授業の方法－資料提示型・オンライン・オンデマンド ⇒2020年5月から遠隔授業開始

③遠隔授業について学生にアンケート調査－54%の回収率

- ・遠隔授業は半分以上がスマホで受講
- ・Meet、Chat、Zoom、Gmail、Classroom について利用した学生それぞれ 8 割ほどが満足  
→最も合っていた遠隔授業は Classroom（課題配信など）という回答が一番多かった
- ・遠隔授業になったことで 2 年生以上は、今までよりも学修時間が増えたとの回答が多かった
- ・トラブルはなかったか  
→・文字による指示が多く、分かりにくい → 外国籍の学生が多いことも考えられる  
・初期設定の問題  
→トラブルの解決として、担当教員に連絡したり、友達に連絡した
- ・全体の振り返りとしては「だいたいできた」「よくできた」がほとんどであった
- ・対面授業が始まることと遠隔授業が継続することに対するの楽しみ度は、両方とも半数以上が楽しみと回答
- ・自由記述について  
→なれると遠隔授業も良かった、両方とも残してほしい  
コメント欄の活用などで質問がしやすい、資料の配信で予習がしやすい  
振り返りがしやすい  
計画的に学習出来た など

④考察

- ・Classroom の活用で、スマホでも満足度の高い遠隔授業となった
- ・スマホだといつでもどこでも学習に取り組める
- ・計画的に学習に取り組みことが出来る
- ・オンライン授業で通常の対面授業と同様なコミュニケーションができた
- ・学習時間は増加し大変だけど、良いことであると評価している

⑤課題

- ・通信環境の整備の必要性
- ・文字だけでは分かりにくい
- ・システムの利点を生かす、併用していくための検討

## 7. パネルディスカッション：遠隔授業の「過去・現在・未来」

司会：川又、パネリスト：山路、林、向山、伊東、犬飼)

25分のパネルディスカッション

川又：発表の振り返り

山路先生→遠隔授業の歴史の振り返りをしながら現在の状況・FD・今後の考察

林先生 →YouTubeなどの活用について

向山先生→県立高校での実践、規則正しい生活・不得手の先生へのフォロー

伊東先生→意識調査とまとめ・提言

犬飼先生→大学での遠隔授業、学生の思い・手法とともに

川又：遠隔授業と対面授業の振り分け、それぞれで出来ること、使い分け、運用

向山：遠隔と対面両方とも必要

休校期間後も遠隔が続いている→動画の投稿やアーカイブなど、活用している教員がいる

効果があるからこそ続いているのでは

伊東：向山先生の授業→タブレットを使いながらの授業

同時に配信、同時に回答→休んでいる時間はない

とある学校の実践：プリントにQRコード→解説ビデオ付きのプリント作成をしている学校も

林：学校再開後の授業について

- ・休校期間中は動画があるので、省略→動画を見ていない生徒も  
→パソコン教室で動画を見て2~3週間振り返りの時間を設ける→確認テスト
- ・期末テストのために動画をみて見直した子も
- ・今でも勉強し直すことが出来るコンテンツとして意味がある

山路：コロナ後ー遠隔授業に向いているか

- ・来年の授業に向けて、もしもの対応（遠隔授業の実施を想定して）としてシラバスにその場合についても掲載する必要があると考える→最初に断っておくべき

→インフラ整備も説得力がないのでは

川：コンセンサスをどうとっていくのか、学校内での先生間の動き

伊東：学校内でうまくいくか

校長に思い（どうしたら出来るか）

→教員に思いがある学校→充実した取り組み

→教員に思いがない→少し進む

→進んだ学校にはこのような視点がある、この視点で（パネリストに）回答してもらえれば

林：私立中学校に対して、公立では環境面はいろいろ

→不平等だ→だから何もしないのは違う

→（環境が十分でない生徒には）サポートをする面を頑張る

→取り組み批判的な声も→ノルマは課していない→実際はすべての教科において動画を実施

→特別支援学級では学級通信的な感じで動画をあげた

向山：①ビジョンーICTを配られて始まった学校→どうやって形にしていくのか

→一部の先生の使命感で行っていった→校長も

→使うことによるメリットが分かったところから変わった→ビジョンが広がっていく

②サポート体制の必要→・ICTリーダー（クラス役員2名）

苦手な生徒を助ける役目を持っている生徒たち

・得意な先生は苦手な先生からの質問に対して、いつでもウェルカムな状態に対応する体制

③共有の大切さ→自分もやろうと思える（競争原理）

川又：学生を置いてきぼりにしない、しかしサポートしにくい部分も→どのようなサポートをしたのか

犬飼：学生も遠隔のシステムを続けてほしいという声も

・人前で話をするのが苦手な学生も→フォロー

・文字だけでは伝わらない生徒へのフォロー→個別に対応

山路：遠隔の課題に対する回答

→問題意識のある生徒は次々出してくる

質問のやりとりをする生徒も（4割）

対面では理解しているか不安な反応をする学生も遠隔でのレポートではしっかりした内容のものを提出してきている

・ついてこれない子は対面に対応していかないと無理だ、引き上げられない

・話をして、やる気に火をつける必要→遠隔ばかりだと学生を切らざる終えない

・両方を活用していく必要性

向山：遠隔→置いてきぼりにすることを前提にしないと出来ない

→環境を作るのが大変→休校期間中は電話などで分からない生徒への対応をした

林：すべての家庭に家庭訪問を行って現状を確認→根気強く声かけを行った→サポートの大切さ

川又：最後に一言

林：休校があっても対応ができるのかなという自信につながった

山路：入学当初に読み書き話す力を明確にする→学生の力を測定しておく必要がある

学生の個人的な力を知らなさすぎた→準備がいろいろある

向山：新しい授業を共有していく